

るが、その国とは内在と超越、時間と終末の緊張関係をもっていて、単純に可視的な教会や国家とは同一視できないが、キリストを規範とする靈的共同体である。

提題

アウグスティヌスの終末論と中世思想

坂口 昂吉

アウグスティヌスはその終末論において互いに相異なる二つの立場に対決していた。その一つはオリゲネス主義であり、善悪すべての被造物の神への還元を説くと共に、少くとも精神的諸存在者については神からの永遠なる生成と回帰を説いていた。これは新プラトン派的な永劫回帰の歴史観のキリスト教内における残滓であり、克服さるべきものであった。第二にアウグスティヌスが対峙したのは、Chiliasmusであり、キリスト再臨から千年にわたる聖徒たちの平和が続いた後、初めて天上への帰還という真の世の終りが到来する、という主張であった。これは末期ユダヤ教およびキリスト教の黙示文学に源流を発するものである。

まずアウグスティヌスとオリゲネス主義との対決について論じたい。彼は当初、この問題の内蔵する重大性に気付いていなかったらしく、397年の直前、ヒエロニムスがルフィヌスのオリゲネス主義を非難して論争が起った時に大変衝撃を受け、『書簡73』3章6節にその痕跡がうかがえる。けれども彼は後年、オリゲネス主義的傾向の背後にひそむキリスト教的歴史観との背理を明確に悟り、やがてヒエロニムスや他の教父たち以上にその謬説を断罪するに至ったのである。413年以降に書かれた『神の国』21巻17章で彼はのべている。「オリゲネスは、悪魔の頭 (diabolus) と彼の天使たちもその業に適わしくより重く長い刑罰の後、その苛責から解放され、聖なる天使たちの仲間に入れられるべきだと考えたのである。教会が彼を断罪したのは誠に適わしい。それは上述の主張や他の幾つかの誤謬のため、また特に幸福と不幸の絶え間ない交代と、一定の時間において幸福から不幸へ、また不幸から幸福へと永久に循環が生ずるとする説のためである」。なおかかるアウグスティヌスの適確な弾劾は、教皇アナスタシウス一世によるルフィヌス及びオリゲネスに反

対した一連の書簡が発表される引き金になったものと考えられるのである。

次にアウグスティヌスの Chiliasmus との対決に論を移したい。彼は『神の国』20巻2章で回顧して述べている如く、初期において、未来における千年王国の到来を、それが粗野な物資的平和と繁栄でない限り認めていたのである。『説教259』2章の叙述はまさしくこの初期の態度を裏打ちするものである。「第七の日は、この地上における聖徒たちの未来の平安を意味する。この時、主は地上において聖徒たちと共に支配し給うであろう。そして主は教会を保ち、そこにいかなる悪しきものも入らぬよう、あらゆる邪悪の汚染からそれをわかち浄め給うであろう」。アウグスティヌスはこの第七の日、即ち第七の時代たる地上における安息の期間の後に、第八の日として初めて世の終りににおける新しい生命を考えており、まさに純粋な靈的 Chiliasmus を主張しているのである。

ではなぜ後年のアウグスティヌスは、この靈的 Chiliasmus とそれに基く時代区分を完全に捨て去ってしまったのであろうか。彼がかかると変化を遂げた直接の外的契機は、410年における西ゴート王アラルリックによるローマ荒掠、及びヴァンダル族がガリアからヒスパニアを経て429年にアウレタニアへ肉迫したこと、を主とする社会的動揺であろう。そしてかかる事態を背景に、かつ三世紀末にポルフェリウスが提出した問いが、異教徒はもちろんキリスト教徒の心をも深刻に把えたからであらう。即ちキリスト教はそもそも一地方宗教であって、しかも最近創始されたばかりではないか。それがなぜ、人類救済というが如き普遍的意義をもちうるのか、という問いである。414年から417年の作といわれる『ヨハネ福音書講解』9巻9章から16章は、この問いに対する解答ともいべき重要な時代解釈を行っている。それは、カナの婚姻の奇蹟における六つの水がめが、キリストの降誕において収斂する世界史の六時代、即ち Adam¹Noe²Abraham³David⁴transmigratio in Babyloniam⁵Johannes Baptista⁶finis saeculi を示すものであるとし、同じく6章において次のようにのべている。「かの六つの水がめは六つの時代を示し、それによって予言は欠けるところがない。この六つの時間は節目毎に秩序よく分けられている。そしてもしこれがキリストによって満たされなければ空の器の如くになってしまうであらう。主イエズスがそこにおいて予言されず、時間が空しく経過した (tempora quae inaniter currerent, nisi in eis Dominus Jesus praedicatur) としたら私は一体どう言った

らよいのか。予言は満たされ水がめは満ちている。だが水がぶどう酒に変わるためには、このすべての予言においてキリストが知られねばならないのである。』アウグスティヌスはここで、天地創造より最終目標たるキリストと教会の出現までの諸時代が救済現象の普遍化の過程であることを示し、ポルフェリウスの批判に完全に答えたのである。けれどもこの解答はまた、キリストの降臨によって全く時満ち、今はただ世の終りを待つばかり、と説くことにより、未来の第七の時代を切り捨て、いかなる意味でも Chiliasmus が入り込む余地を否定したのである。即ちローマ帝国創建以来未曾有の危機に直面したアウグスティヌスは、キリスト教を地方から流れ込んだ疫病神の如くみる異教徒に対してその普遍的救済史的意義を明示すると共に、キリストの恵みによる地上での安易な発展に全く自信を失ったキリスト教徒に対して終末まぢかに立つ自らの位置を教えたのである。かくしてかつて未来に設定されていた第七の時代は、現在の第六の時代と併存し、死せる聖徒の魂の安息状態を示すことになる。また Chiliasmus の説く千年は、完全数として単に世の終りを示す象徴に過ぎないものとなるのである。

このように現在を最終の時代とするみかたは、399年から419年の作『三箇一体論』4巻4章7節における、律法以前 (ante legem), 律法の下 (sub lege), 恩寵の下 (sub gratia), の時代区分でも全く等しい。そこで恩寵の下の時代は、前述の第六の時代に相応するのである。また 389年の作『マニ教徒に駁論するための創世記講解』1巻23章35節から24章42節における幼児期 (infantia), 少年期 (pueritia) 青年期 (adolescencia), 壮年期 (iuventus), 長老期 (gravitas), 老老期 (senectus) という世界史の六時代区分も、『ヨハネ福音書講解』のそれと等しいものである。ただしこれらの時代区分が 410 年におけるローマ荒掠の以前のものであることに注目すべきである。即ちアウグスティヌスは初期においてすでに終末間近しとの意識をもっていたのであり、ただそれが霊的 Chiliasmus の承認と併存していたのである。ただ後年における危機感の高まりが、後者の決定的拋棄となったのである。

なおこの世の終りを待つばかりの第六の時代、即ち恩寵の時代でもありながら老老期でもある現在の基本的特色を明らかにすべきである。この時代にはキリストが降誕し、教会が創立され、悪魔は完全な行動の停止を受けるのではないにせよ強い拘束を受ける。これは、一定の姿を現わすことがなかったとはいえ、太古から civi-

tas terrena との間に絶えざる相克を続けてきた *civitas Dei* が、秘蹟の共同体として顕在化したといつてよい。したがってアウグスティヌスは、*mundus senescens* の中において世俗的な苦難の増大のうちにますます希望に燃え、また彼の牧する信者たちをもこの希望にかりたてたのである。『詩篇講解』148章8節で彼は言う。「われわれは巡歴しているのであるから、今なお惨めである。かの地へ将来帰るであろうという希望において幸福である。かの地へ帰るであろう時には事実において幸福なのである。」けれどもかかる終末への希望が強ければ強いほど、将来の計画は世俗の意味ではもちろん宗教的意味でも薄れ、地上における未来の時代像は消失していくのである。むしろその代りに健全な保守主義が生ずるといってよいであろう。

上述のようなアウグスティヌスの終末意識は、グレゴリウス・マグヌスをはじめ中世前半の多くの思想家たちの間で、殆んど不動のものとして受容された。グレゴリウス・マグヌスは、593年頃の作、『福音書説教集』1巻19の1で、全時代を Adam¹Noe²Abraham³Moyse⁴Christus⁵finis mundi と五つに区分している。これは未来に新しい時代を設定していない点で、アウグスティヌスの終末観とほぼ同じと考えられる。グレゴリウスの時代は、なお古代末の衰退期を受けついでおり、修道制の出現をみるとはいうものの、未だにセナトール貴族が文化の担い手の主流を占めていたことも、彼の伝統主義につながったものとみるべきであろう。

けれども中世盛期、とくに十二世紀頃から作家たちに終末意識の変化がみられる。一般的にこの時代は経済的・文化的に復調の兆しをみせ、また新修道会の出現をみたことなどが、終末論の変化に反映したともいえるであろう。シトー会士で帝国書官長であった Otto von Freising は1143年から1146年に起草した『年代記』(Chronica) 8巻の序でキリストの国と邪悪の国の対立発展を、キリスト以前、キリスト以後現在まで、未来、の三段階に分けている。そしてその各々の段階で、キリストの国は、*status humilis*, *status medius seu mediocris*, *status perfectus* といった進展の道歩み、邪悪の国は、*miser*, *miserior*, *miserrimus* という墮落の途を辿るという構想をたてた。ここには未来に対する新しい時代設定のわく組がみられる。しかしその内容は貧弱で大胆な発言はないのである。

また同時代の教会改革者 Gerhoh von Reichersberg (1093—1169)は、『第四の夜の見張り』(De quarta vigilia noctus) という対話篇を書いた。彼はこの中で世界史は

衰亡の道程であるが、この闇夜は個々の聖人や英雄によって破られる、と説く。さらに彼は歴史を四段階にわけ、第一をキリストの時代、第二を異端克服の時代、第三を道徳的墮落の時代、第四をグレゴリウス七世から最後の審判までとしている。そして第四の時代には教会の内的腐敗がおこるが、聖霊による貧しき聖者たち (*beati pauperes spiritu*) がこれを救う、と予言する。この作品は新時代の設定こそないが、宗教的意味での地上における新しい世界の展望をもつ点注目すべきである。

さらにカルツジョ会士 Anselm von Havelberg (1129—1157) の作『対話篇三巻』 (*Dialogi Liber Tres*) も注目すべきである。彼は、歴史を神による人類教育の業であり、その教化の手段は真理と聖霊であると説く。彼によれば、旧約は御父のみを教え、新約は御父と御子のみを教え、聖霊をおぼろげに教えるにとどまった。しかし聖霊に対する認識は次第に高まりつつ現代にいたっている、という。彼はまさにアウグスティヌスと同じく、律法以前、律法の下、恩寵の下の三時代を設けたが、教会が始まったのはキリストからではなく義人アベルからであるとす。そして教会はキリストの降誕を中心にはさんで、律法の下、恩寵の下、さらに終末の選ばれた人々 (*novissimus electus*) にまで進展する。また教会の発展を理解するには、黙示録』の七つの封印 (*septem sigilli*) をキリスト以後の時代に適用して解釈すべきであるという。これは特にのちに発展した黙示録の聖書解釈を先取している点で注目すべきである。

以上にのべた十二世紀の著作家たちは、もちろんオリゲネス的な永劫回帰的思想からは程遠い立場にあるが、反面 *Chiliasmus* に近い発想をしている点で、アウグスティヌスの終末論から微妙なずれを示している。なぜなら彼らは、未来にキリストが地上で千年間にわたり聖徒たちと共に統治するなどとは説かないにせよ、将来になんらかの形で宗教的新時代が到来すると予想しているからである。

この線上の発展として隠修士 Joachim de Flora (1145—1202) が、特にその『黙示録講解』 (*Expositio in Apocalypsim*) を中心に、キリストの時代の後に聖霊の時代の到来を予告した意義に注目すべきである。ここにはアウグスティヌスとは明らかに異なる終末意識がみられる。ヨアキムは、アウグスティヌスの伝統的な六時代にかわって、父の時代、子の時代、聖霊の時代の三区分を提唱した。この各時代は42世代すなわち1260年の期間をもつとされ、しかも聖霊の時代はさし迫った未来に地

上に出現すべきものであった。この来るべき時代には *hierarchia* が消滅し、靈的修道士が支配する。けれども単に教会組織の変化による救済史の新段階が到来するのみでなく、富も権力も持たぬ平和皇帝や天使的教皇の出現により、全社会的規模での改革が生ずるはずであった。ヨアキムの提起したものは、アウグスティヌス的な未来なき終末論ではなく、将来に教会と社会の刷新を待望する新しい終末論であったといつてよい。彼が未来に1260年にわたる靈的平和の時代を設定したことは、十二世紀以来兆していた *Chiliasmus* 的傾向の完成である。ただしヨアキムが、聖靈の時代にではなく真の意味での世の終りにキリストの再臨を置いていることは、同じく *Chiliasmus* といつても浄化されたものであると言うべきであろう。

ヨアキムのこの新しい終末論は、1273年、フランシスコ会総会長 Bonaventura が著した『天地創造講話』(*Collationes in Hexaemeron*) の中に受容された。ボナヴェントゥラはここで、アウグスティヌスの時代区分の大わくを認めた上で、その第六の時代すなわちキリストから世の終わりまでをさらに七つに細分した。そしてこの小分けされた時代の七番目のものを未来における靈的修道士の時代としたのである。ただし彼の未来に対する理想像は、自分の生きていた時代の教会や修道会や政治状況など社会的現実との深いかかわりをもって描かれており、ヨアキムの夢幻的予言とは著しい相違を示している。とはいえ、十三世紀においては *Matthaeus de Aquasparta* に次いでアウグスティヌスに精通し、しかもその精神を尊重したボナヴェントゥラの如きスコラ学者にすら、新しい歴史意識が滲透していたことは注目すべきである。

アウグスティヌスの終末論は、オリゲネス主義的な歴史循環論の残滓を払拭した点で古代的なものから訣別すると同時に、*Chiliasmus* の全面的否定によってそこに内蔵されていた未来主義を排除したものである。彼の終末意識は、その時代区分と共に中世思想、それも特にその前半の歴史観においては圧倒的影響をもった。けれども特に十二世紀以降において、宗教的靈的意味で未来における地上での刷新と再生が意識されはじめると、ここにアウグスティヌスとは顕著に異なった歴史像が形成されてくると考えるべきであろう。